

## 弘前市成田裕家文書

石塚雄士

成田裕家文書（以下「当文書群」とする。）は、弘前市山道町で齒科を開業していた成田裕氏の家に伝来した総点数七十一点からなる文書群であり、現在、その大部分が成田裕氏の希望により、弘前市立博物館に寄託されている。

成田家は天和二年の親類書（No.六〇）及び文政四年の由緒書（No.六七）によると、はじめ紙漉沢（現中津軽郡相馬村）に住居しており、戦国末期には河辺村（現南津軽郡田舎館村）に住居していた。近世成田家初代となる左馬之助が、津軽為信から慶長七年に「新知新田高」三十石を与えられたことで、成田家は戦国時代以来の在地の土着的存在「小知行」として近世弘前藩の体制に組み込まれることとなった。

そして、左馬之助は、元和五年に津軽氏が越後への転封を命じられた際、同行を願い出た八十三人の「小知行」である「八十三騎」に名を連ねており（『青森県史』資料編近世2 二六五頁）、転封が撤回された後、二代の成田左助が元和七年に新田高七十石を加増され、百石の知行高で士分に取立てられた。

このように成田家は開発に関わって身分を上昇させていき、幕末に至るまで知行高百石を代々与えられ、藩内でも中級の家柄として御手廻・

御馬廻の各番頭等の役職を勤めていた。

当文書群は桐箱に厳重に納められており、変事の際には持ち出すようにといひ伝えられるなど、代々重要なものとして伝来されてきたもので、平成十五年五月三十日に青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さんグループ（現文化観光部文化振興課県史編さんグループ）近世部会が調査を実施し、目録作成及び写真撮影を行ったところである。

当文書群の特色として、弘前藩の歴代藩主が発給した知行宛行状が原本・控ともに全て残存しており、各時代の知行宛行状について系統的にとらえることが出来るという点がある。

本稿では紙面の都合上、当文書群の全てを掲載することは出来なかったが、知行宛行状類、知行帳類、由緒・親類書の三種類に大別し、それぞれ注目されるものについて解説を加えた。このほか本稿に掲載しなかった資料として、登城催促、隠居願、各種の手控等がある。

また、各文書名の冒頭に付した番号は、県史編さんグループの調査により作成した目録に係る資料番号である。

なお、翻刻について、用字は原則として常用字体に改め、原史料の訂正部分について、見せ消しがある場合は抹消部分の左側に記号「」を

付し、右側に訂正字句を示した。抹消部分については、字数が判明する場合 ■■■ で示した。

## 一 知行宛行状類

弘前藩の歴代藩主から成田家が受領した知行宛行状及び知行目録は、受領した原本とその控の全てが残存している。ここではその原本について年代順に掲載したほか、知行宛行に際して藩に献上した札銀の請取状も掲載した。

なお、知行宛行状については『青森県史』資料編近世2に、弘前藩の重臣であった杉山家に伝来した、四代藩主以降の知行宛行状類が一括して所収されている。知行高の多寡による知行宛行状の形態等の差異について、今回紹介する成田家の知行宛行状と対比してみると興味深いものと思われる。

### 一 河辺村左馬助宛知行宛行状 切紙(写真①)

(包紙) 河辺村左馬之助 一

知行

合三十拾石、但屋敷共、

慶長七年 寅 八月十四日

河辺村  
左馬助

現在津軽で確認されている知行宛行状の中で最初期のものである。

後の知行宛行状と比較して形式等は整っておらず、印章・花押共に見受けられないが、慶長十四年に宛行われた石高とほぼ等しい石高が記載されている。

「小知行」であった河辺村左馬助が慶長七年当時所有していた領知高を、藩主が認めた書付と考えられる。

### 四 津軽信枚黒印知行宛行状 切紙

(包紙) 高源院様 御黒印

知行之目録

高合貳拾六石者、但川辺村ニ有、  
右令扶助訖、全可領知者也、

慶長十四年

七月廿一日(黒印)

川辺村ノ左馬介

石高、知行地を書き出し、黒印が据えられており、成田家に与えられた知行宛行状として、形式が整った最初のものである。

また、「弘前藩庁日記」(国日記)延宝三年三月四日条(『青森県史』資料編近世2 二七二頁)には、当該文書が四代藩主津軽信政の上覧に供されたことが記されており、延宝三年段階で既に藩として貴重な文書として扱われていたことがうかがえる。

五 津輕信枚黒印知行宛行状 竪紙(写真②)

一 (包紙)  
高源院様御代御印

知行之目録

成田左助

高貳拾七石者

本知行之分

高拾石五斗三升八合

打出之分

高五拾七石七斗貳升一合貳勺

荒地分

畠高四石七斗四升八

荒地分

高合百石者

右令扶助訖、全可領知者也、

元和七年

三月二日 信牧(黒印)

成田左介へ

成田左介に、以前からの知行地である川辺村(現南津輕郡田舎館村)

の中で「本知行之分」二十七石に、新田開発の成果である「打出分」十石余と、今後開発されるべき土地である「荒地分」六十二石余の計七十二石余を加増して百石を宛行うという内容である。

本資料は、新たに開発が成就した場合にその一部を開発者の知行として認定するほか、開発予定の土地をあらかじめ知行地として給与するという弘前藩の初期の開発政策を端的に示すものであるといえる。

なお、弘前藩二代藩主の名乗として「信枚」と「信牧」があるが、本

資料には「信牧」とある。この問題については長谷川成一氏の論考

(「信枚と信牧―その名乗についての考察」 弘前の文化財シリーズ No.

一四『津輕藩初期文字集成』所収)がある。

八 津輕信吉黒印知行宛行状 竪紙

知行之目録

一、川辺村之内

高合百石者

右令扶助訖、全可領知者也、

寛永十一年

正月十一日 信吉(黒印)

成田左介へ

一一 津輕信政黒印知行宛行状 竪紙

(包紙表)

一 妙心院様御代御印

成田左助

(包紙裏)

「正徳式」<sup>壬辰</sup>年八月二日、右御印ノ写指上ケ申所ニ御帰し被遊候、

御本紙ハ則御帰申候、

知行之目録

一、川辺村之内 一、藤崎村之内

高合百石

右令扶助訖、全可領知者也、

寛文元年十一月十日 信政(黒印)

成田左助とのへ

一四 津軽信政黒印知行宛行状 折紙

①紙  
「 成田左助とのへ」

高百石

右令扶助之訖、全可領知者也、

貞享四

正月十九日（黒印）

成田左助とのへ

四代藩主信政は襲封間もない寛文元年と貞享四年の二度にわたり知行宛行状を発給している。本資料は貞享の統一検地の成果を受けて発給されたものであり、貞享検地が弘前藩において大きな意味を持った事業であつたことを示すものと考えられる。

また、貞享二年三月に地方知行の蔵入が宣言され、藩士には知行高の六〇%の割合で蔵米が支給されることとなった（『青森県史』資料編近世2 二六一頁）ことから、これまでの知行宛行状にあつた知行地の村名は消え、石高のみの記載となっている。

一七 津軽信壽黒印知行宛行状 折紙

①紙  
「 成田左次兵衛とのへ」

陸奥国

於領分津軽郡内

高百石 別紙有 事、右令扶助之訖、全可領知者也、  
目録

正徳二

八月六日（黒印）

成田佐次兵衛とのへ

別紙目録のとおり高百石を宛行うという内容である。

これに対応する同日付けの知行目録（No. 一六）も残存しており、和泉村（現南津軽郡田舎館村）・川辺村（現南津軽郡田舎館村）・藤崎村（現南津軽郡藤崎町）の三ヶ村に知行地が割り振られている。

この直後に知行水帳が発給され、知行取層の藩士への俸禄支給が、蔵米支給から地方知行となつたことが「津軽編覧日記」等に見えている。実際に地方知行が実施されたかどうかはともかく、このような藩の方針転換によって、知行地の目録が別紙として添付される形式となつたものであろう。

一六 松浦甚左衛門・唐牛甚右衛門連署知行目録 継紙

①紙  
「 知行目録  
目録」

陸奥国

津軽郡之内三ヶ村

一、和泉村之内 一、川辺村之内

一、藤崎村之内

高合百石

右今度以此趣被成下知行御黒印訖、此儀兩人可勤仕旨所被仰出也、仍述達如件、

正徳二年八月六日

松浦甚左衛門

良知 (花押)

唐牛甚右衛門

喜治 (花押)

成田佐次兵衛殿

## 二〇 津輕信著黒印知行宛行状 折紙

一 (同封)

成田弥右衛門とのへ

陸奥国

於領分津輕郡内

高百石 別紙有 事、右但先判之旨依承祖令扶助之訖、全可領知者也、

元文元

十一月十九日 (黒印)

成田弥右衛門とのへ

(同封)

「元文二丁巳九月廿八日、知行目録頭被下仕候、拙者儀病氣故

藤田八太夫名代二候也、

## 一九 蒔苗市兵衛・唐牛平次連署知行目録 繼紙

一 (同紙) 知行目録

目録

(貼紙) 「成田弥右衛門」

陸奥国

津輕郡之内三ヶ村

一、川辺村之内 一、藤崎村之内

一、和泉村之内

高合百石

右今度以此趣被成下知行御黒印訖、此儀兩人可致勤仕旨所被仰出也、仍述達如件、

元文元年十一月十九日

蒔苗市兵衛

清永 (花押)

唐牛平次

親由 (花押)

成田弥右衛門殿

## 二五 津輕信寧黒印知行宛行状 折紙

一 (同紙)

成田左次兵衛とのへ

高百石

右如前賽令扶助之訖、全可領知者也、

宝曆六

閏十一月十二日 (黒印)

成田左次兵衛とのへ

〔同封〕 覚

知行水帳 参冊、右者御用ニ付御上納被成請取候如件、  
外ニ書替目録迄通、

安永三年甲午年八月拾八日

湯元弥五右衛門（黒印）

成田左次兵衛殿

知行宛行状から知行目録に関する文言が消えており、目録も添付されていない。

この時期乳井貢による宝暦改革が進行しており、地方知行から再び蔵米支給への転換が図られ、さらに「標符」による支給へと転換したことにより知行宛行状の形式も変化したものであろう。

また、翌宝暦七年には地方知行に転じ、安永三年には再び知行蔵入となるなど、方針の転換が度々行われている。それを示す資料として、この資料には安永三年八月十八日付の、成田左次兵衛が知行水帳三冊を藩に上納した際の受取証が同封されている。

### 二三 津軽寧親黒印知行宛行状 折紙（写真③）

〔同封〕 成田左助とのへ

高百石

右扶助之訖、先代雖有賜印之意不及其事、則以予印総之如旧知全可領知者也、

寛政六

閏十一月朔日（黒印）

成田左助とのへ

九代藩主寧親が成田左助に知行高百石を宛行うという内容である。

この前年、寛政五年から藩士土着政策が断行されており、藩士土着の徹底への藩の意思を示し、藩士に対して土着を推進するための動機付けを行う意図をもって、発給されたものであると考えられる。

また、注目すべき点として、「先代雖有賜印之意不及其事、則以予印総之如旧知全可領知者也、」という文言があり、「先代」すなわち八代藩主信明が「賜印之意」を持ちながらも知行宛行状を発給することなく死去したこと、その遺志を継いで寧親が知行宛行状を発給し、旧知を安堵したことがとくに記されている。

このような文言が付された背景には、知行宛行の発給という藩主と藩士との主従関係の確認行為を行おうという意思を、藩主が持ち続けていたことを明示し、天明大飢饉や寛政改革の実施等による藩政の混乱の中で、藩主が両者の関係を維持しようと努めていたことを藩士に知らしめる意図があつたのではないだろうか。

そして、分家である黒石津軽家から信明の後継者となつた寧親が、先代信明の遺志を継ぎ、先代に代わって藩士の知行を安堵することにより、自らの正統性を主張しようという意図が存在したものと考えられる。

加えて、藩士土着という、地方知行への政策転換が行われていたにも関わらず、当資料には知行地についての記載はなく、蔵米支給が実施されていた時期に準じた形式となっている。このことも、蔵米支給であつ

た信明時代に発給されるべき知行宛行状を、寧親が信明に代わって発給したのであるということを強調する意図によるものではないだろうか。

二九 津軽信順黒印知行宛行状 折紙

「(包紙) 成田岩蔵とのへ」

高百石

右如前賚令扶助之訖、全可領知者也、

文政八

十一月朔日(黒印)

成田岩蔵とのへ

二七 津軽順徳黒印知行宛行状 折紙

「(包紙) 成田岩蔵とのへ」

高百石

右如前賚令扶助之訖、全可領知者也、

天保十一

三月七日(黒印)

成田岩蔵とのへ

二六 津軽承昭黒印知行宛行状 折紙

「(包紙) 成田弥門とのへ」

高百石

右如前賚令扶助之訖、全可領知者也、

安政六

十一月六日(黒印)

成田弥門とのへ

九 乾四郎兵衛・服部長門守連印礼銀請取状 切紙(写真④)

「(包紙) 桂光院様 御黒印

成田左助 「

請取申銀子之事

合毫貫目者 次銀也、

右者高百石知行之御礼銀也、已上、

寛永九年

八月十九日

乾四郎兵衛尉(黒印)

服部長門守 (黒印)

成田左介とのへ

成田左介が高百石知行の礼銀として、次銀なみぎん(次銀とは、弘前藩の領国貨幣。詳しくは長谷川成一著『弘前藩』吉川弘文館 二〇〇四年 五二頁参照)一貫目を献上した際の家老二名の連印による請取状である。本資料の包紙と内容は一致しないが、これは後年の錯誤によるものである。本稿には現在の資料の状況をそのまま示した。

知行宛行・加増の際に礼銀を献上するという例は、慶長期の出羽国山

形最上領に見られ、『本莊市史』通史編Ⅰ 五八三頁)、弘前藩においても、同様の行為が行われていたことを示す資料である。

本資料は、成田左介が元和七年に七十石加増された事に対する礼銀献上と考えられるが、元和七年から本資料が作成された寛永九年までは十一年という年数が経過している。このことについて近世前期の弘前藩の開発政策を考えると、加増分に含まれていた「荒地分」に係る成田家の新田開発がこの時期に至って概ね成就し、また、歟下年季の期間も満了したことで、寛永九年に名実ともに高百石の知行が藩庁に認められたことにより、礼銀献上が行われたと考えることは出来ないであろうか。

このような弘前藩における、知行に係る礼銀献上がどのような場面で行われていたかについては今後の研究が待たれる。

## 二 知行帳類

知行帳類としては、明暦三年の知行帳と天明四年の収納米取箇帳(ただし内容は寛政期のもの)が残存しており、ここではその二点について掲載した。

### 一三 明暦三年惣御検地之表知行帳

(表紙)

「明暦三年

惣御検地之表知行帳

成田左助」

一、高七石六斗五升三合式勺

百性

川辺村弥右衛門

やしき 四斗八升五合老勺

同

大豆 六斗老升六合

同

一、式石老斗式升五合式勺

百性

同村久兵衛

やしき 三斗四升六合八勺

右同

大豆 七斗八升八合

同

粟 四斗式升

同

麦 四斗式升

同

一、やしき 老斗三升八合八勺

百性

川辺村久右衛門

一、高四拾五石六合四勺

同村二有、手作

やしき 九斗七升老合

同

大豆 三石老斗五升七合

同

粟 六斗七升式合

右同

麦 六斗

同

油 老斗七升六合

同

麻 老貫式百八拾目

同

一、高拾式石四斗式升四合式勺

川辺村二有

大豆 式斗九升六合

作人三右衛門

一、高式石九斗一升式合四勺

同村二有、作人  
小右衛門



一、高五石三斗三升

大豆 式斗三升六合

粟 四斗四升八合

一、高貳石壹斗一升八合八勺

一、やしき畠 壹斗貳合

高合九拾七石七斗

同村ニ有、作人  
平助

右同

同

川辺村ニ有  
作人彦藏

同村ニ有、作人  
小右衛門

明暦三年に実施された領内検地の際の成田左助の知行帳である。

成田左助は川辺村内に、百姓分として二十二石九斗九升三合一勺、手作分として五十石五斗八升二合四勺及び麻一貫二百八十目、作人分として二十三石七斗七升七合四勺、計九十七石七斗七升七斗を知行していた。

元和七年に加増された六十二石余の「荒地分」の大部分が、明暦三年までの三十六年間で耕地化されていたことがわかる。

また、小作地であったと考えられる作人分と、本人家族が耕作している手作分の石高の合計は、総知行高の約七六%を占め、在地の開発領主であった「小知行」による新田開発の成果と、実際の知行形態がうかがえる資料である。

津軽領の明暦検地は黒石津軽家の分知に伴い、黒石領と予定された地域に限定して実施されたとされているが、成田家の知行地であった川辺村は黒石領に予定された地域ではない。しかし、本資料の表紙には「惣御検地之表」とあり、同様の表題を持つ資料は当文書群以外にも数点残存している。(弘前市立博物館蔵川村家文書)

貞享の統一検地以前の津軽領における検地の実施状況については、依然不明な点が多いが、「弘前藩庁日記(国日記)」寛文四年四月十三日条に「一、此前十郎左衛門様江御知行被進候刻、御老中様へ被懸御目候御高之内一通認可有之候、其高ハ拾三万石余欵と覚候事、」とあり、同日条に「一、新御検地之御帳面之目錄、一通念を入認可有事、」とあることから、黒石分知の際、藩庁が津軽領の領知高を十三万石と把握したところと、少なくとも寛文四年に至るまで、津軽領において二度以上の検地が実施されていたことがわかる。

また、「津軽編覧日記」明暦二年条に「一、今年御郡中惣御検地、一説翌三年共有、」明暦三年条に「一、今年御検地之表水帳御家中江被下之、」とあり、明暦二年に領内の総検地が実施されたこと、明暦三年にその検地に基づいて作成された「水帳」が家中に下付されたことが見えしており、津軽領全体について、この時期何らかの形で検地が実施されたと考えてよいのではないだろうか。

### 三三 知行田畑御収納米取箇帳

(表紙)

「天明四 甲辰年

知行田畑御収納米取箇帳

二月

成田庄蔵

」

寅年田畑諸調表

一、田高三拾四石九斗三升五合

藤兵衛

一、畑高八石壹斗三升八合

同人

一、田高貳拾五石六斗三升三合

三右衛門

一、畑高三石七斗五升八合

同人

一、畑高壹石七升三合

弥七郎

一、田高四石七斗貳升四合

佐五兵衛

一、畑高壹斗六升七合

与四郎

一、畑高壹斗四升四合

佐藤四郎

一、畑高四斗八升四合

万十郎

一、田高九石六斗壹升壹合

権三郎

一、田高拾壹石壹斗九升八合

甚四郎

一、田高壹斗壹升五合

藤崎村分

田高合八拾六石貳斗壹升六合

畑高合拾三石七斗六升四合

式口ノ九拾九石九斗八升

田に六九三

畑に五六

佐右衛門

藤兵衛抱

一、田高三拾石三斗五升八合

成米拾八石貳斗壹升四合八勺

小役米九斗八升九合七勺

(畝)

一、米格

一、上田壹畝貳拾四步

分米貳斗三升四合

同  
一、中田壹反六畝六步

分米壹石七斗八升貳合

反別合壹反八畝步

分米貳石壹升六合

成米壹石貳斗九合六勺

小役米八升三合九勺

米合壹石貳斗九升三合五勺

(俵)  
表ノ参俵九升三合五勺

高懸銀壹匁四分壹厘

右者藤兵衛抱之内佐左衛門持分抱内分江相渡、

寛政元己酉年六月

寛政六年寅年九月廿日

一、畑高壹石五斗三升壹合

成米七斗六升五合五勺

小役米四升貳合九勺

米合貳拾石壹升貳合九勺

表ノ五拾表壹升貳合九勺

高懸銀貳拾貳匁三分貳厘

田高

六反七畝拾参步 分米七石四斗八升

成米四石八斗八升 小役米 貳斗壹升貳勺

佐左衛門

高懸銀五匁四分四厘

田高

五反五畝五歩 分米六石五升七合

成米三石六斗五升四合貳勺

小役米貳斗五升三合六勺

高懸銀四匁貳分七厘

寛政四壬子年二月相認

与三郎

一、田高四石五斗七升七合

成米貳石七斗四升六合貳勺

小役米壹斗四升九合貳勺

米合貳石八斗九升五合四勺

表ノ七表九升五合四勺

高懸銀三匁貳分

一、  
(縣紙)

一、畑高三石六斗八升三合

成米壹石八斗四升五勺

小役米一斗三合壹勺

米合壹石九斗四升三合六勺

表ノ四表三斗四升三合六勺

八郎兵衛

高懸銀貳匁五分八厘

同人

一、畑高壹石七斗三合

成米五斗三升六合五勺

小役米三升

米合五斗六升六合五勺

表ノ壹表壹斗六升六合五勺

高懸銀七匁五厘

十一月十日、森新蔵へ相渡ス、

藤兵衛抱

藤崎

弥五郎

一、畑高三石七斗六升壹合

成米壹石八斗八升五勺

小役米壹斗五合三勺

米合壹石九斗八升五合八勺

表ノ四表三斗八升五合八勺

高懸銀貳匁六分三厘

同人

一

弥七郎抱

藤兵衛抱

与四郎抱

一、畑高壺斗六升七合

成米八升三合五勺

小役米四合七勺

米合八升八合式勺

表ノ四表三斗八升五合八勺

高懸銀壺分式厘

太郎兵衛

一、畑高式石式斗六升六合

成米壺石壺斗三升三合

小役米六升三合四勺

米合壺石壺斗九升六合四勺

表ノ式表三斗九升六合四勺

高懸銀壺匁五分九厘

藤崎

嘉兵衛

一、田高七石壺斗九升六合

成米四石三斗壺升七合六勺

小役米式斗三升四合六勺

米合四石五斗五升式合式勺

表ノ拾壺表壺斗五升式合式勺

高懸銀五匁四厘

同人

一、田高壺斗壺升五合

成米六升九合

小役米三合七勺

米合七升式合七勺

高懸銀八厘

三右衛門

一、田高拾八石四斗三升七合

成米拾壺石六升式合式勺

小役米六斗壺合壺勺

米合四石五斗五升式合式勺

一、畑高四石七升壺合

成米式石三升五合五勺

小役米壺斗壺升四合

米合拾三石八斗壺升式合八勺

表ノ三拾四表式斗壺升式合八勺

高懸銀五匁四厘

藤崎村領分

三右衛門抱

同人

七之丞

いつみ村  
権三郎抱

小役米壹升三合六勺

米合貳斗五升五合六勺

高懸銀三分四厘

一、田高九石六斗壹升壹合

成米五石七斗六升六合六勺

小役米三斗壹升三合三勺

米合六石七升九合九勺

表ノ拾五表七升九合九勺

高懸銀六匁七分三厘

寛政四子年二月八日川辺村七之丞江同村三太夫相渡、

藤越村

久右衛門

久十郎抱

庄九郎

佐五兵衛抱

一、畑高三斗四升八合

成米壹斗七升四合

小役米九合七勺

米合壹斗八升三合七勺

高懸銀貳分四厘

前田屋敷村

大藏院

万十郎

甚九郎

いつみ村

甚五郎抱

一、畑高四斗八升四合

成米貳斗四升貳合

一、田高拾壹石壹斗九升八合

成米六石七斗壹升八合八勺

小役米三斗六升五合壹勺

米合七石八升三合九勺

表ノ拾七表式斗八升三合九勺

高懸銀七匁八分四厘

### 右之寄

藤崎村領残石入々

一、田高八拾六石式斗壹升六合

成米五拾壹石七斗式升九合六勺

小役米式石八斗壹升六勺

一、畑高拾三石七斗六升五合

成米六石八斗八升式合五勺

小役米三斗八升五合四勺

米合六拾壹石八斗八合壹勺

表ノ百五拾四表式斗八合壹勺

高懸銀六拾九匁九分九厘

### 中間錢

一、錢四拾匁

### 内

式拾九匁六分三厘

四匁式分五厘

三匁四分式厘

式匁壹分

三分式厘

式分九厘

但藤兵衛抱江代地成候、  
ノ四拾匁壹厘

一、錢三拾匁

式拾式匁六分五厘

七匁三分五厘

ノ三拾匁

弥五郎

大分蔵

藤越村  
久右衛門

三右衛門

三右衛門抱

三右衛門

藤崎村  
嘉兵衛

表題には天明四年とあるが、内題には「寅年田畑諸調表」とある。

天明四年以降の直近の寅年は寛政六年であり、内容も寛政四年から六年の状況を記すことから、表題とは異なり、寛政改革により藩士土着政策が実行に移された時期の資料であると考えられる。

### 三 由緒・親類書

当文書群には親類書十冊と由緒書二冊が残存している。

親類書・由緒書共に形式の変化等は見られないことから、本稿では、親類書については最も早い時期に作成された天和二年のもの、由緒書については、残存している二点の記載内容がほぼ同様であることから文政四年のものを選択して掲載した。

六〇 天和二壬戌年親類書

(表紙)

「天和二壬戌年

親類書

成田左助<sup>(ママ)</sup>

成田左助<sup>(ママ)</sup>

親類書

大道<sup>(ママ)</sup>

大道寺隼人組

父方

御手廻<sup>(ママ)</sup> 御手廻

年四拾八<sup>六</sup> 成田左助

一、曾祖父

瑞祥院様御代慶長七年八月  
服部勘助養子ニ被仰付、

成田左馬之助

一、叔父

御知行高三拾石被下置御郡  
奉行支配ニ而罷有相勤候、  
延宝六年十月十日病死仕候、

成田左右衛門

十四日御知行新知新田高

三拾石被下置、御奉公之品不

伝承候、寛永拾三年三月廿

日病死仕候、

一、曾祖母

曾祖母慶安二年十一月廿七

成田仁助娘

後ニ左衛門次郎ト云、

一、祖父

高源院様御代家督無相違被仰付候、

成田左助

御奉公之品不伝承候、元和七

年三月二日ニ御加増新田高

七拾石被下置都合高百石ニ被

成下八拾三騎之内ニ而相勤候、

正保元年三月廿五日ニ病死仕候、

一、祖母

祖母寛永三年十一月十八日病  
死仕候、

成田左衛門五郎娘

一、父

桂光院様御代正保元年七月廿二日

成田左助

家督無相違被仰付八拾三騎之

内ニ而御奉公仕候、寛文五年十二月

隠居被仰付候、延宝六年二月

廿一日病死仕候、

一、叔父

御知行高百石被下置新地土ニ而

工藤国兵衛

御奉公仕候、延宝二年四月

廿九日病死仕候、

御知行高三拾石被下置御郡

奉行支配ニ而罷有相勤候、

延宝六年十月十日病死仕候、

叔母承応元年四月八日病死

対馬甚助妻

仕候、

一、叔母

源左衛門儀高三拾石江御足輕月<sup>ニ而罷有候、</sup>

飯詰村源左衛門妻

御番支配、叔母寛文拾年十一月十一日

病死仕候、

一、叔母

叔母存生ニ而罷有候、

新屋四五左衛門妻

一、姉

姉存生ニ而罷有候、

成田左左衛門妻

一、弟

三橋左右衛門方江智養子ニ奉

三橋太次右衛門

願此度被仰付御知行高百

一、妹	有候、			一、姪	与次右衛門手前二罷有候、	石橋与次右衛門娘
一、妹	妹存生二而罷有候、	田中小兵衛妻	一、姪	与次右衛門手前二罷有候、	海老名左兵衛手前二罷有候、	海老名源左衛門娘
一、妹	妹存生二而罷有候、	石橋与次右衛門妻	一、姪	海老名左兵衛手前二罷有候、	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、妹	妹存生二而罷有候、	花田与次右衛門妻	一、姪	誰娘共伝不承候、	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、妹	妹存生二而罷有候、	海老名源左衛門妻	一、姪	委細不伝承候、	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、子	寛文五年七月十九日初御目見仕候、	成田左次兵衛	一、姪	「委細不伝承候、」	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、娘	娘存生二而罷有候、	戸田六右衛門妻	一、姪	「委細不伝承候、」	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、子	手前二罷有候、	成田兵之助	一、姪	「委細不伝承候、」	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、娘	手前二罷有候、	成田左次兵衛子	一、姪	「委細不伝承候、」	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、孫	手前二罷有候、	成田弥郎九郎	一、姪	「委細不伝承候、」	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、孫	手前二罷有候、	戸田六右衛門娘	一、姪	「委細不伝承候、」	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、甥	六右衛門手前二罷有候、	田中小兵衛子	一、姪	「委細不伝承候、」	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、甥	御知行高百石御馬廻杉山勘左衛門組二而罷有候、	田中小兵衛	一、姪	「委細不伝承候、」	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、甥	子兵衛手前二罷有候、	田中小兵衛子	一、姪	「委細不伝承候、」	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、甥	与次右衛門手前二罷有候、	石橋与次右衛門子	一、姪	「委細不伝承候、」	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、甥	与助手前二罷有候、	花田与助子	一、姪	「委細不伝承候、」	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、甥	何方江茂奉公不仕中川村罷有候、	海老名源左衛門子	一、姪	「委細不伝承候、」	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、甥	海老名左兵衛手前二罷有候、	海老名源左衛門子	一、姪	「委細不伝承候、」	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、甥	左々右衛門手前二罷有候、	成田左々右衛門娘	一、姪	「委細不伝承候、」	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、甥	太次右衛門手前二罷有候、	三橋太次右衛門娘	一、姪	「委細不伝承候、」	「委細不伝承候、」	棟方掃部
一、甥	与次右衛門手前二罷有候、	石橋与次右衛門娘	一、姪	「委細不伝承候、」	「委細不伝承候、」	棟方掃部



一、母	母正保二年二月二日病死仕候、 <small>(貼紙)</small>	棟方左衛門娘
一、伯父	「御知行高百石被下置御本参	棟方嘉右衛門

二而相勤候、延宝五年十二月

廿三日病死仕候、

一、伯父  
(貼紙)  
 「何方江茂奉公不仕鬼沢村二罷有、棟方七郎右衛門

慶安五年五月廿七日病死仕候、

一、伯父 何方江茂奉公不仕鬼沢村二罷有、棟方源七

一、伯母  
〔貼紙〕  
「伯母存生二而罷有候、」  
崎野与助妻  
東方客古衛門子

一、從弟 御知行高百石御手廻森岡主膳

組二而罷有候、

一、從弟 御知行高五拾石御勘定算者

小頭被仰付罷有候

一、從弟  
御知行高三拾石江御足輕警固

櫻庭半太夫支配二而罷有候、

一、從弟 一御知行高拾五石

1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8

獵師頭仕罷有候、

以上

## 一、高百石

內	九拾七石七斗	有地
二石三斗		無地

一、本国奥州、本所津輕紙漉沢、

一、生国奥州、生所津輕川辺村、

一、宗門、禪、

一、寛文元年十一月十日、御知行御目錄御印親頂戴仕候、

一、寛文五年十一月十五日、家督無相違被仰付候、

一、延宝七年正月十二日、御手廻被仰付候、

一、紋丸之内ニツ引龍、

一、差物之出シ白懸、横五寸長サ七寸、

右之通二而御座候、以上、

成田左助

成田左助

天和二年戊午十二月十五日

勝方（花押）

久保田市郎左衛門殿

黒土刑部左衛門殿

六七 文政四辛巳年由緒書

(表紙)

「文政四辛巳年

由緒書

成田岩蔵

由緒書

## 一、先祖

成田左馬之助

實名不佞承候

本国奥州本所津輕紙漉沢、

瑞祥院様御代、慶長七年八月十四日御知行新知高三拾石被下置、

御奉公之品不伝承候、寛永十三年三月廿日病死仕候、右之外委細

不伝承候、

一、二代

成田左助

実名不伝承候、

元和五年七月六日御国替被仰付候節、何方迄も御供可仕候旨申上候、高源院様御代家督、御奉公之品不伝承候、元和七年三月二日御加増新田七拾石被下置、都合百石ニ而八拾三騎相勤申上、正保元年三月廿五日病死仕候、

一、三代

成田左助

実名不伝承候、

桂光院様御代正保元年七月廿二日家督、高百石無相違被下置八拾三騎ニ而御奉公仕候、寛文元年十一月十五日隱居願之通被仰付、延宝六年二月廿日病死仕候、

一、四代

成田左助勝方

妙心院様寛文五年十一月十五日家督、高百石無相違被下置御手廻相勤、元禄六年江戸登被仰付、其後下り候年号月日不伝承候、同十年二月廿五日病死仕候、

一、高曾祖父

成田左次兵衛格柄

妙心院様御代元禄十年九月廿八日家督、高百石無相違被下置御手廻式番組被仰付、同年九月廿三日大間越町奉行被仰付、正徳四年十一月廿三日御馬廻番頭被仰付、享保十年十月廿八日御役御免願之通被仰付、同年十一月廿八日隱居願之通被仰付、同十一年十一月三日病死仕候、

一、曾祖父

成田弥右衛門格清

玄桂院様御代享保十年十一月廿八日高曾祖父家督、高百石無相違被下置御手廻式番組相勤、元文三年七月晦日隱居願之通被仰付、

宝曆八年十月十八日病死仕候、

一、祖父

成田左次兵衛格廣

顯休院様御代、元文三年六月朔日御手廻四番組江御組入被仰付、同年七月晦日曾祖父家督、高百石無相違被下置、明和五年十月朔日大間越町奉行被仰付、同七年八月廿一日御馬廻七番組番頭被仰付、安永九年九月朔日御手廻五番組番頭被仰付、天明二年二月廿五日病死仕候、

一、父

成田左助勝貞

御奉公見習

戒香院様御代、安永七年六月朔日御馬廻五番組江御組入被仰付、天明二年七月朔日祖父家督、高百石無相違被下置、同四年十月朔日御小性組被仰付、上仙院様御代寛政四年十一月朔日御膳番被仰付、同十二年六月廿六日御留守居組江御役替被仰付、文化四年三月廿八日御手廻三番組被仰付、同七年三月十一日病死仕候、

一、私儀文化四年九月朔日御奉公見習願之通御手廻式番組江御組入被仰付、同七年七月朔日父左助家督、高百石無相違被下置、文政八年十月

四日御馬廻三番組番頭被仰付、同十三年八月廿一日御手廻四番組番頭被仰付、天保十年九月廿八日御使番被仰付、

一、瑞祥院様御代、慶長七年八月十四日、知行

御墨付先祖左馬之助頂戴仕候、

高源院御代、慶長十四年七月廿一日、知行

御印右同人頂戴仕候、

高源院様御代、元和七年七月二日、知行

御印二代目左助頂戴仕候、

桂光院様御代、寛永十一年正月十一日、知行

御印三代目左助頂戴仕候、

妙心院様御代、寛文元年十一月十日、知行

御印右同人頂戴仕候、

妙心院様御代、貞享四年正月十九日、知行

御印四代目左助頂戴仕候、

玄桂院様御代、正徳二年八月六日、知行

御印高曾祖父左次兵衛頂戴仕候、

顕休院様御代、元文元年十一月十九日、知行

御印曾祖父弥右衛門頂戴仕候、

戒香院様御代、宝暦六年閏十一月十六日、知行

御印祖父左次兵衛頂戴仕候、

上仙院様御代、寛政六年十一月朔日、知行

御印父左助頂戴仕候、

侍従様御代、文政八年十二月朔日、知行

御印私頂戴仕候、

当御代、天保十一年三月七日、知行

御印私頂戴仕候、

一、家屋敷拝領之儀不伝承候、

右之通御座候、以上、

文政四辛巳年十一月

藤原氏

成田岩藏

勝栄印  
(花押)

間宮権太夫殿

笹角之丞殿

本稿を記すにあたり、弘前大学人文学部・大学院地域社会研究科の長谷川成一教授、県立青森北高等学校教諭の本田伸氏、青山学院大学非常勤講師の千葉一大氏、青森県立郷土館の瀧本壽史学芸主幹に多大な御教示をいただいた。御礼申し上げたい。

また、成田裕氏には、本稿で史料紹介をすることについてご快諾をいただいた。改めて厚く御礼申し上げます。

(いしづか・ゆうじ 青森県史編さんグループ主事)

# 文書写真

写真②



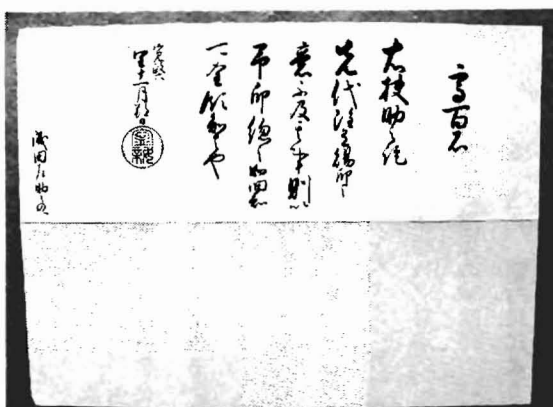
五 津輕信枚黒印知行宛行状

写真①



一 河辺村左馬助宛知行宛行状

写真④



二三 津輕寧親黒印知行宛行状

写真③



九 乾四郎兵衛・服部長門守連印礼銀請取状